

私のプロジェクト X

齊藤有司

まえがき

私のプロジェクト X は今もって未完成であるが、土木技術者としての出発点から事務部門への転向、そして、会社経営の一端を担わせてもらっている現在に至るまでの半生を、ドキュメントとして表現することで代えたいと思う。したがって、プロジェクト X とされるような立派な考えがあった訳ではなく、紆余曲折の人生が、周りの方々のお陰で結果的にプロジェクト X のような形にさせてもらえたらとの願望が大いに入っている。

プロジェクト X と言える形への完結に向かえるか否かは、私のこれからの生き方次第で決まってくると考えている。その前に、何故、土木技術者になったか？ そこから入りたいと思う。

1. 進路の選択(彷徨える時)

昭和 35 年、所得倍増計画を引っ提げた池田勇人が内閣総理大臣となり、カラーテレビが本放送を始め黒四ダムが完成し、正しく日本が戦後を脱却した感がそこそこに溢れていた。当時、高校一年の私は、この先起きる自身の挫折のことなど考えてもいなかった。

楽しい高校生活の中で起きた葡萄酒試飲事件？ 自宅の甕に漬けてあった山ブドウ酒をこっそり飲んだのが運の尽きで A 型肝炎となり、1 か月半入院した。それ以降、勉強とは無縁となり当時流行っていたハワイアンに夢中になり、いつの間にかスチールギターを演奏するバンドリーダーになっていた。したがって当然だが大学受験どころではなく二浪もした。流石に、2 回目の受験の時、親は心配し土木の短大を受験することを許してくれた。今となっては、挫折した私の事を立ち直らせようとした親の気持ちに手が取るように解り深く感謝している。

短大では、普通高校を卒業していたので、土木の素養は全くなかった。逆に、何も解らなかったので、猛勉強しなければ皆に付いて行けなかった。進路は

国家公務員をと考えていたが、卒業間近になって教授は「止めておけ、将来素晴らしい会社になる勤め先があるぞ」という。結局、ドーコン、当時の北海道開発コンサルタントに入ることになった。今となつては、天国の教授にも深く感謝している。ただ、入社してみると教授は会社の顧問だった。

2. 土木技術者として(この道で生きてゆこう)

昭和 42 年入社して最初の現場は、札幌高速自動車道の測量だった。来る日も来る日も測量線の伐開(測量線打設のための草木の除去)だった。お陰で、鬱蒼とした樹林と戦う裡に筋骨隆々の V 字型の体になっていた。測量は 5 月から 12 月まで続いた。

そのなかで、土木技術者として一生に残る、震えるような感動を受けたことを、昨日の事のように覚えている。それは、測量も終わり初冬になって張碓トンネル上の尾根の中心線上に登った時、悪戦苦闘した札幌高速自動車道の 20km に及ぶ伐開線痕に雪が白く積もり、まるでカレイの骨のように縦横断線がくっきりと美しく見えたことだった。

小樽から札幌に向かう道内最初的高速自動車道の中心線が、力強い北海道の未来を象徴しているようで、胸が高鳴ったことを覚えている。伐開で地面を這いまわっていた時は分からなかったが、土木という仕事の大きさと達成感を初めて味わった時であった。

これが、土木技術者として生きて行こうと歩み始めた第一歩ではなかったかと思っている。

当時小樽で流行っていた、三船浩の「小樽の赤い灯が見える」の歌詞「夜の闇ゆくヘッドライトに、はねありの散る札幌国道〜」を聞く度、若かりし時の私と共に、土木技術者として生きて行こうと決めたその時の感動が蘇ってくる。



札幌自動車道(朝里インターチェンジ)



防雪対策(吹き払い柵)

3. 楽しかった設計業務(技術の楽しさ)

20代半ばから40代半ばまでは、高速道路、交差点、環境アセスメント、防雪対策などの設計業務に携わった。多忙で一つの事をじっくりやれなかったという面はあったが、兎に角、仕事が面白く充実した期間であった。

札幌や道央道等の高速道路の設計では、東名高速道路をお手本とするミリ単位のインタチェンジなどの設計図面と格闘し、交差点設計ではボトルネックの要因解析や新設交差点の設計を行った。環境アセスメントは、旭川・函館などの地方都市バイパスの環境影響評価として、大気汚染・騒音・動植物などの現況調査と予測推計を行った。防雪に関する業務では、冬季路線の安全確保と不通区間の開通に向けて、災害規模の特定と有効な防雪対策の立案を行った。

時代の要請という事もあったが、当時、楽しく様々な仕事をさせてもらったのは、優れた部下と上司に恵まれたからだと思う。○上司(技術士)は何時も新しい事にチャレンジしていた。私は何も解らなかったが、仕事に食らい付いて行くことの大切さを、この第一の師匠から教わったと思っている。

ただ、一方で、戦後復興期の大多数の土木技術者と同じく？ 仕事中心の人間だったと反省している。50代を過ぎてから、家族との時間を取り戻そうと苦勞をしているが、少し手遅れの感がある。

4. 事務部門への転向(人あつての技術)

昭和63年に技術士試験に合格し技術者としても意気揚々としていた時だった。平成3年、突然事務部門(総務)への配置替えとなり、意気消沈の船出となった。しかし、良く考えてみると技術を看板にするほどの専門性もない私にとって、残りの人生を再構築する絶好の機会であったかなあと、今にして解る。意外と周りの方々のほうが、私を正しく評価していたと思う。

そんな訳で、事務部門の一職員としてスタートした私は、会社という所は技術と事務の双方の絶妙なコミュニケーションの上に成り立っていることに遅まきながら気がついた。

当時、部下に何時も話していた言葉がある。「会社は家庭と同じで、お父さん(技術部門)と、お母さん(事務部門)の双方の信頼関係の上に成り立っています。皆さん、お父さんの言う事にも耳を傾ける、頭の良いお母さんになりましょう」。

ずいぶん偉そうなことを言っていたと思うが、その考えは、今も、私の信条として守っていきたいと思っている。

事務部門でも素晴らしい部下と上司に恵まれたことは幸いだった。

会社は、さまざまな荒波をくぐって成長する。技術者も一人の人間である。人間力や価値想像力を磨いた上での技術ほど素晴らしいものはない。

13年ほど前から会社経営の一端を仰せつかっているが、時代とともに会社を取り巻く環境や職員の

意識も変化する。経営者としての最も大切なことは、時代の変化に機敏に対応し、常に働く職員の立場に立って考え、かつ、信念を持って決断することであると思っている。

優れた技術者集団をお母さんのような心でマネジメントする時ほど、経営者にとっての喜びはない。マネジメントする喜びを知ったのは、第二の優れた師匠である A 上司(技術士)が居たからだと思う。どんな時も、笑顔を絶やさず、先進の判断と大局観を持って経営にあたっておられたのが印象的だった。

5. 日本技術士会のお手伝い (know-how を持った人との出会い)

日本技術士会には平成 4 年に入り、今年でもう 22 年になる。昨年、北海道本部長を終えるまで、会員の皆様のお陰があって務めてこられたとつくづく感謝している。

特に、昨年 94 歳で他界され長年ご指導を頂いた佐々木元支部長様には、北海道支部の発展に大きく貢献されことに、改めて感謝を申し上げたい。

技術士全国大会や理事会やイベント等で多くの技術士の方々と交流をさせていただいている。技術士会会員の皆様にも様々な方々がいることが分かってきた。

人間的に深く魅力のある方、特定の技術にとっても秀でた方、両方のバランスの取れた方、コミュニケーションを大切にされる方、とにかく酒のめっぽう強い方等、新しい部門が許されるなら〇〇部門と付けてあげたい方が何人もおられた。

また、北東 3 支部(北海道・東北・北陸本部)の技術研修交流会での、地元技術士の皆さんとの交流も忘れられない。平成 19 年の中越地震や平成 20 年の岩手・宮城内陸地震の時も、地域の防災という観点から、3 本部の技術士の皆さんが協力し、真剣に取り組んでおられた姿が目には焼き付いている。

特に、北陸の中山名誉本部長さんとは、今も親しくお付き合いをさせていただいているが、感性豊かなお人柄で、温かく私たちを包んでしまう方という印象が強い。技術は、その人の know-how と共に、

それが人のためになれるか否かという、しっかりとした視点があって初めて理解を得られるものだという事を知らされた。

北海道本部の強みは何といっても結束力であると言える。委員会などの後に必ずセットされる情報交換会、部門の壁を取り払い無礼講での自由闊達な意見や発想が飛び交う。そして、総合力のある懐の深い本物の技術士が一人また一人誕生してゆく。

東日本大震災の時、私たち北海道本部の仲間も本当に心が痛み、何とか復旧・復興の力になれないかと部門を飛び越えて真剣に話し合った。

昨年、札幌で開催された第 40 回技術士全国大会では、能登大会実行委員長を筆頭に北海道本部の結束力が遺憾なく発揮された。特に、短期間で大震災・津波の予測に関する資料の取りまとめを行った関係者の皆様のご苦労は、言葉では言い尽くせない。



第 40 回技術士全国大会(平成 25 年 10 月)

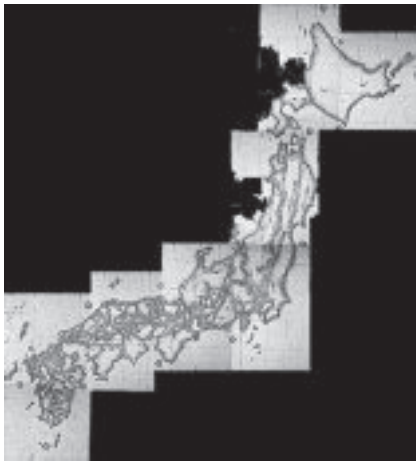
6. 私のプロジェクト X(これから…)

私の尊敬する偉人は、伊能忠敬と間宮林蔵である。伊能は 50 歳で酒屋を隠居し 55 歳から 70 歳まで、15 年間に亘り老体に鞭を打ち全国の沿海を 4 万 K 測量するという壮大なプロジェクトを完遂させた。伊能と間宮は 35 歳程年が違うが、伊能の「大日本沿海輿地全図」作成の過程で、間宮が江差から留萌・稚内・別海に至る、蝦夷地西・北海岸の伊能の未測量部分を補ったことが、全図完成にこぎ着けた大きな要因となっていると言われている。

伊能は 1818 年 73 歳で没したが、その 3 年後、国家事業となった「大日本沿海輿地全図」は完成し、

日本の科学技術のレベルの高さを、全世界に知らしめることになった。この技術が無かったら、今頃、日本は欧米の植民地になっていたかも知れない。もちろん、経済や科学で世界に発信する今の日本はなかったのではないかと思う。

正しく、このご両人は蝦夷を北海道に変えた。北海道は、この二人の偉人の偉業によって国土としての仲間入りを果たし、明治以降の開拓使の歴史と共に発展を遂げていった。



大日本沿海輿地全図

今、北海道の未来を考えると、技術士が率先し提案しなければならない仕事は無限にあると思う。日本の将来を左右するエネルギー問題、北方領土問題、新聞を賑わせている TPP に象徴される農業問題、高齢者の増加に伴う将来の人口問題など、これらの難問題を前向きに捉え、次世代を担う子供たちに明るい未来の夢を託す上で、技術士の果たす役割は大きいと言わざるを得ない。

こうして考えてみると、私自身の小さなプロジェクト X への挑戦は、これからかもしれないと想ったりする。技術士という素晴らしい仲間の皆さんと、共に生かさせてもらっているという現実に感謝し、子供たちの夢創りの一端にでも加わって貢献して行けたらと想う。

私自身の事になるが、2 年程前突然健康を害する出来事が起きた。人生、何が起きるか一寸先は闇であるという事を改めて知らされた。今も、体の不自由さは残っているが、リハビリを続けかなり回復し

てきた。それ以来、周りの方々の温かいご支援に助けられ励まされ続けている。

最近、会社設立に深く関わった父のように尊敬する第三の師匠 K 上司と親しくお酒を酌み交わしている。90 歳になる師匠の貴重な体験談を基に、好いことも悪いこともある人生のトータルのバランスシートについて、振り返ったりしている。

今、尊敬するお二人の偉人の事を考えると、遙か天空の星の感があるが、紆余曲折の人生に改めて感謝し、私なりのバランスシートと私自身のプロジェクト X が完結できるよう、これからも、努力して行きたい。

斉藤 有司 (さいとう ゆうじ)

技術士 (建設 / 総合技術監理部門)



経歴

1944 年 9 月 札幌市生まれ
1967 年 3 月 北海学園短大卒
1967 年 4 月 北海道開発コンサルタント(株) 入社
同社道路課に配属
1991 年 4 月 同社総務部へ配属変え
1995 年 4 月 日本技術士会北海道支部事務局長
2001 年 6 月 (株)ドーコン 取締役
2005 年 4 月 日本技術士会 理事
2009 年 4 月 日本技術士会 北海道支部長
2009 年 6 月 (株)ドーコン 取締役副社長
2013 年 4 月 日本技術士会北海道本部 特別顧問
2013 年 6 月 (株)ドーコン 取締役相談役